会　議　録

会　議　名	令和３年度第２回小金井市立はけの森美術館運営協議会		
事　務　局	市民部　コミュニティ文化課（はけの森美術館）		
開　催　日　時	令和３年８月１１日（火）１８時３０分～１９時４５分		
開　催　場　所	市立はけの森美術館　多目的講義室		
出　席　委　員	鉄矢悦朗会長 原田隆司委員 坂井文枝委員 加藤治紀委員 河田京子委員		
欠　席　委　員	山村仁志委員		
事　務　局　員	コミュニティ文化課文化推進係　　吉川、岡本 同　　はけの森美術館学芸員　中村、河上、西尾		
傍　聴　の　可　否	可		
傍聴不可・一部不可の場合は、その理由		傍聴者数	０人
会　議　次　第	１　展覧会「画家のメタモルフォーゼ―中村研一、その作風の変―」の観覧 ２　事業実施報告等 ３　意見交換等 ４　その他		
会　議　結　果	別紙のとおり		
会　議　要　旨	別紙のとおり		
提　出　資　料	開催した展覧会・ワークショップ等及び今後の予定		

令和３年度　第２回小金井市立はけの森美術館運営協議会

令和３年８月１１日（水）

【鉄矢会長】　　皆様、こんばんは。本日もお暑い中お集まりいただき、誠にありがとうございます。少し涼しくはなっていますけれども、雲行きは怪しい感じです。ただいまより令和３年度第２回小金井市立はけの森美術館運営協議会を開会いたします。

次第の１の展覧会の観覧については、まだ坂井委員は見ていないかもしれないですけれども、どこかで見てください。議題を進めたいと思います。ほかの方は見たということで、よろしいですか。

配付資料の確認をお願いします。事務局のほうから。

【事務局】　　では、本日お配りしたものは５点ありまして、次第と、あとチラシと招待状と、資料が１、２でセットで４枚あります。最後、議事録となります。もし資料がない方がいらっしゃれば、挙手をお願いします。

【鉄矢会長】　　１、２でセット。資料１というのは。

【事務局】　　４枚資料で、右上のほうに。縦長の資料１と２で４枚です。

【鉄矢会長】　　分かりました。

【事務局】　　よろしそうです。

【鉄矢会長】　　ありがとうございます。

それでは、次第の２、事業実施報告等について、開催中の展覧会の内容を事務局から説明をお願いします。

【西尾学芸員】　　展覧会の担当を務めました西尾と申します。今回の展覧会は、７月１２日から緊急事態宣言が再発出されたのですけれども、近頃のこの状況を鑑みまして、新型コロナウイルス感染対策を万全に行った上で開館するということを決定し、７月２８日から予定どおり開催しております。現在の時点での来館者数は、先週頃から飛躍的にコロナの感染者が増えたということもあり、大きく来館者の数が減少したということもありまして、現在トータルの来館者の数は９５名となっております。というのが展覧会を開催している現状となっております。

【鉄矢会長】　　ありがとうございました。何か質問、御意見等ありましたら、どうぞ。

私、質問なんですけれども、この「画家のメタモルフォーゼ」というものの区分が、風景画とかというものの前に、一番最初に１と書いてあって、次も１と書いてあって、その次も１と書いてあって、〇〇編、〇〇編で分けているという案内がすごく私には分かりにくかったような気がしたんですね。特に１の２つ目ぐらいのときに、出だしが、向こう側の絵の説明が始まって、向こう側の絵はこうですよと書いて、その次に「その後」と書いてあったので、ここの絵の説明はどこに書いてあるのかという気がしました。

それから、グローブの絵のところなんですけれども、年代的に変化していくのかなと思ったら、あそこは年代が行ったり来たりしているところがあったりして、どのようにあそこは行ったり来たりしたのかなと思って、特に戦争のところですよね。戦争が終わるか終わらないかのところの絵だったので、非常にその辺が気になって、静物画と、グローブのほうが戦前で、静物のあるコーナーが、戦争は終わりなのか何なのかというぐらいのときなのかなと思って、ちょっとあの辺の位置関係が何か意図的にやったのだったら、それを教えてほしいなと思って。

【西尾学芸員】　　まず、解説文の分かりづらさということに関しては、今後は、例えばもう少し細かく、１－１とか１－２とか、そのように視覚的に分かるようにしたほうがいいかなというのは、今伺って思いました。

入り口で配付しているリストのほうに、一応視覚的に分かるようにしたつもりではあったのですけれども、今後は、流して見たときにもう少し分かりやすいナンバーの振り方などは気をつけたいなと思いまして、そうですね。おっしゃるとおり、静物画に関しては、本当は年代ごとに置いたほうがきれいで、最初はそのような配置で考えていたのですけれども、可動壁は、それなりの大きさがある可動壁に作品を並べたときに、配置のバランスを考えてあの配置にちょっと変更したんです。ただ、結果的に最後、私も、ヤマトさんに展示をしていただいた後に、よっぽど戻そうかどうか迷って今の形にしたのですが、そこは再考の余地があったかなと、今お話を伺って、反省しております。

【鉄矢会長】　　いや、反省したくて言っているわけではないんですけれども、時代を追っかけて見てくるものなのかなと思っていたら、年代をちょっと聞いていたら、へえーっと思ったので、ちょっと困ったなという気がしました。

【原田委員】　　感想でよろしいですか。

【鉄矢会長】　　はい。

【原田委員】　　私も同じように、「作風の変化」という題なので、時代を追って変化していくというのが分かるのかなという気持ちで見たものですから、それはその都度、絵に書いてある年代を見ると、あれっ、違うな、行ったり来たりしているなと。だから、そうか、ではこれは画風の年代的な変化というものを見せる展覧会ではないんだなということに途中で気がついたんです。

では、僕自身として見て面白かったのは、例えば裸婦の絵一つとっても、後のほうに出てくる裸婦は背景がすごくきちんと描かれていて、裸婦像は今まで何度か見ている絵なんだけれども、違った感じで見られましたね。それは、解説が的確に書いてあったからだと思うんです。

それから、勲章をつけた肖像画も、あれも何度も見ているのですけれども、あれもその解説に書いてありましたけれども、その勲章の描き方、すごくしつこいほど描いてあるんです、本当に。それから、この肩章というのかな、肩の飾りなどもきちんと描いてあって、随分今までと違った印象で見ることができました。これは何だろうな。単に画風が変化したというよりは、何か、俗な言葉で言うと、気合を入れて描いているときはああいう描き方になるのかなと、あの方は。でも、そうではない絵もいっぱいあるんですけれども、今度見て面白かった今挙げたようなところは、非常に訴えてくるものがあって、こういう絵が描きたいんだと。全然、戦争中の風景画などとは違う勢いというものを感じて、面白かったと思います。

以上です。

【西尾学芸員】　　ありがとうございます。

【鉄矢会長】　　ありがとうございます。

では次に、今後の開催予定の展覧会について、事務局から説明をお願いします。

【中村学芸員】　　学芸員の中村です。本日はちょっと自宅のほうからオンライン参加をさせていただきます。

報告のほうですけれども、今後の展覧会の予定をまず①から、説明させていただきます。今年度の令和３年１０月３０日から、秋の展示ですけれども、こちらは企画展としまして、「二人のスケッチ―藤島武二と中村研一」と題しました企画展を予定しております。会期は１０月３０日から１２月１２日までを考えております。現状では、開館時間や休館日などは、コロナウイルス感染症防止対策のために、現状のやや減少したものとする予定でおります。

内容としては、公益財団法人大川美術館から藤島武二のスケッチを１００点拝借する、これは前回の運営協議会で報告させていただいたとおりですけれども、この１００点を展示するということを当初考えていたのですが、はけの森美術館の独自色を出すということで、中村研一のスケッチと藤島武二のスケッチとという形で二人の画家にフォーカスした展示にするという方向で考えております。

観覧料ですとか、その他の条件は資料に提示したとおりです。

関連企画として、幾つかの可能性をいろいろ考えておりますが、今のところ新型コロナウイルスの拡大が続いておりますので、関連企画のことについてはまだちょっと御報告できるような形で確定はしておりません。感染状況などの見通しが立って、報告できるような形になれば、改めて報告させていただきたいと思います。

今後開催予定の展覧会の①については以上です。

【鉄矢会長】　一回切りますか。続けますか。

【事務局】　続けてください。

【河上学芸員】　②は私なので、では②を。展覧会の②の担当を予定しております河上です。

こちらは、タイトル「所蔵作品展　かげもまた光なり―中村研一の色」ということで、まだ仮題ではありますけれども、中村研一の戦後の後期の作品を中心とした所蔵作品展の企画を予定しております。まだ会期、開館時間は全て未確定ですけれども、資料にありますとおり、今年度に関しては、今の①の企画展と同じような開催内容といいますか、時間、休館日等は――観覧料は違いますが、所蔵作品展も時間を短縮した形で行う予定でおります。また、関連イベント、ワークショップ等に関してもまだ未定でおります。

以上です。

【鉄矢会長】　ありがとうございました。では、何か質問、御意見等ありましたらお願いします。

【坂井委員】　ちょっとよろしいですか。もしかしたらもうお話は皆さん御存じのことかもしれないんですけれども、観覧料の設定の仕方というのは、今回、今の「メタモルフォーゼ」は２００円で、次の二つの企画は５００円でという、この違いは。

【河上学芸員】　私が今ちょっと言い間違えてしまったんですけれども、所蔵作品展の観覧料は２００円。すみません。

【坂井委員】　所蔵作品展は２００円。ただ、借用がある場合などは５００円というこ

とですか。

【河上学芸員】　　ちょっとこちらの資料が、ごめんなさい、間違っておりました。失礼いたしました。

【坂井委員】　　間違っていないですよ、２００円だったら。

【鉄矢会長】　　「かげもまた光なり」は違っているんです。

【河上学芸員】　　こちらは２００円です。

【坂井委員】　　２００円なんですか。なるほど、なるほど。

【河上学芸員】　　これは所蔵作品コレクションで、こちらで持っているものなので、２００円で、企画に関しては、変更があるといいますか、そのときそのときで違ってまいります。

【坂井委員】　　分かりました。これを借用するには、借用料みたいなものを相手の美術館さんにお支払いするわけですよね。そのときの金額の多寡によって観覧料は上下するのですか。

【河上学芸員】　　そうですね。拝借する先と、また企画の内容等でいろいろ予算の配分等が変わってまいりますので、そのバランスを見ながらという形で……。

【坂井委員】　　大川美術館の場合は５００円で大丈夫だということなんですか。

【河上学芸員】　　はい。ということで大丈夫でしょうか、中村さん。

【事務局】　　大体、企画展は５００円頂戴しています。そういういろいろな交渉がありますので、うちの所蔵作品をお出しするよりはちょっとお金がかかりますので、５００円を頂戴しています。一応、条例上は上限が１，０００円なんですけれども、１，０００円までの間で企画展についてはコントロールするということになっておりますので、うちの学芸員企画でやる場合は大概５００円なんですけれども、共同巡回展みたいにほかの美術館と一緒にやるときは、ほかの美術館が６００円取るといった場合、うちは５００円にするわけにはいかないので、そういうときはほかの館とそろえて６００円頂くという場合もあります。

【坂井委員】　　そうなんですか。分かりました。今、吉川さんがおっしゃった条例とはどういう条例なんですか。

【事務局】　　小金井市立はけの森美術館条例と、あとは条例規則でしたか、それで金額が決まっておりますので。

【坂井委員】　　分かりました。

【中村学芸員】　　すみません、ちょっと中村のほうから補足させていただきます。先ほど事務局の吉川から指摘がありましたように、美術館の入館料に関しましては、これは小金井市立はけの森美術館条例に、所蔵作品展の観覧料規定というのが金額が入って示されております。ですので、所蔵作品展のほうの入館料は記載のミスです。企画展に関しましては、先ほど吉川からありましたように、１，０００円までの上限というところの幅の中で随時設定する、その都度設定するという形になっております。

既に言及がありましたけれども、他館との巡回展などに関しましては、他館とある程度金額をそろえる必要がありますので、参加館の中で協議して決めています。当館のみでの主催企画の場合は、大体今は５００円程度で金額を設定していることが多いです。所蔵作品展と差別化を図るという意味では、所蔵作品展と同額ではなくて、プラスアルファ、少し乗せるような形にするということですね。

【坂井委員】　　分かりました。

【鉄矢会長】　　ありがとうございます。

そのほか、ございますでしょうか。

【坂井委員】　　２番目のを、河上さん、教えてください。戦後の後期の作品中心ということなんですけれども、これは本当に知識のことで、中村研一の色とは、どんな変遷というか、どんな特徴というか、お話になりそうだとお考えなんですか。

【河上学芸員】　　ここで企画しているテーマとしては、ここにあるように色なんですけれども、色に対するアプローチの仕方というか、それに対する気持ちの変化みたいなものを企画展の中で見せられたなと思っています。戦前に関しましては、淡いトーンだったり、かなり影、陰影といいますか、光を捉えて立体を映すというような、そういった初期の頃の作品を後できっと御覧になるかと思うんですけれども、初期の作品を見ていただくと、やはり背景とその描かれている対象のものが浮き出たような、肖像画などは特にそういう描き方をされているのですけれども、一方で後期の作品は、全体的にグラフィカルというか、平面的になっている。影も、後ろの背景も、手前に描かれているものも同等に扱っている。そういったところが絵の中に見られるという特徴があります。そういったところにちょっとフォーカスを置いて企画ができたらなと考えております。

【坂井委員】　　分かりました。

【鉄矢会長】　　ほかにございますでしょうか。

鉄矢ですけれども、展覧会１のほうなんですけれども、ワークショップではなくて、関

連企画、教えてくださいよと言いたくなるぐらい、人は内緒と言われると聞きたくなるんですけれども、人が集まるような企画なのか、人が集まらないような企画なのか、何か私自身はスケッチを見るとスケッチを描きたくなるほうなので、子供向けに模写教室とかをやってみたいと思っているとかという話なのかなとか、想像しながら聞いているけれども、想像だけでは面白くないので、もうちょっと聞かせていただけますか。できなくても、言ったじゃないのということは言いませんので。

【中村学芸員】　これはちょっと茶室の紹介を兼ねた形で何かできないかなということを考えているのですが、何分、今の状態だと、緊急事態宣言が出てしまったりすると、人が集まって何かをするということは難しいだろうと。できれば少なくとも美術館と、それから美術の森緑地というような、現場に集まって何かをするというイベントをしたいなということは思っているんです。そういうことで言うと、緑地、少なくとも野外という形のところをキープしながら、集まって何かできたらいいなということは考えています。タイミング的に展覧会チラシには載せられないのですが、ホームページを随時更新していって、イベント開催状況に関しては随時ホームページに載っていきますのでチェックしてくださいねという形で、やれるとなったら周知は図りたいなと思っています。

【鉄矢会長】　ありがとうございました。

ここのワークショップをやるときには、イーゼルはあるのでしたっけ。

【事務局】　あります。小さいイーゼルは結構あるよね。１５台ぐらいはあるよね。

【中村学芸員】　はい、あります。

【鉄矢会長】　分かりました。

あともう１点なんですけれども、今回の展覧会で、中村研一は「スケッチ」のことを「エスキス」と呼んでいたのですけれども、こっちでは「エスキス」ではなくて「スケッチ」と呼ぶのでしょうか。

【中村学芸員】　そうです。「スケッチ」という言葉に関しては、これはもともと大川美術館のほうが藤島武二のコレクションのことを「１００枚のスケッチ」と呼んでいるというところから始まっています。ただ、「スケッチ」という言葉は、厳密に定義することもできますけれども、逆に広い意味で捉えることもできる。広い意味で捉えると、「エスキス」なども含む、本画に対しての、そうでないものというものを含む非常に広い概念だと思います。今回はちょっとその「スケッチ」という言葉の「概念の広さ」をあえて生かしていくような形で、いろいろな形の「スケッチ」があることを含めて紹介していく展示にした

いと思っています。

【鉄矢会長】　　分かりました。中村研一が、フランスかぶれというか、フランス系なので、「エスキス」と言いたかったとか、そういう解説があるとすごく分かりやすいのかなと思っています。何か、無理やりどっちかの拡大、同じ言葉で言うわけではなくて、大川美術館から借りているから今回は「スケッチ」ですけれども、中村研一はこういうものを「エスキス」と呼んでいたんですよなどということがあってもいいような気がします。

【中村学芸員】　　ありがとうございます。ちょっと藤島武二のカタログを売らないといけないという関係もありまして。

【鉄矢会長】　　はい。だから、タイトルはこれでよくて、ただ、どこかの解説パネルにそこの違いというのが……、美術をやっている人間はフランス語と英語の違いかなと思っているんでしょうけれども、そうでない人は何か違うんじゃないのと思ってしまうのではないかなと思って、ちょっとその辺が気になりました。

【中村学芸員】　　中村研一の部分でフォローを入れていきたいと思います。

【鉄矢会長】　　お願いします。

あと２点ぐらいあるんですけれども、２番目の「かげもまた光なり」というので、こちらは意見、提案なんですけれども、何か、写真家みたいな人に来ていただいて、皆さんの持っている携帯の撮影とか、そういうことをしながら、本当に「かげも光なり」というのを実感するようなワークショップができたら、手元にあるデバイスでそういうのができるようになったらいいなと思いました。特にプロのカメラマンの解説がちょっと聞けるとかということで、自分の携帯で撮る写真がぐっと変わるなどというのだったら、みんなひょこひょこ来そうな気がするんですけれども。それを受けてくれるカメラマンがいるかどうか分かりませんけれども。

【事務局】　　ありがとうございます。

【鉄矢会長】　　それから、これは全体的に展覧会全部に言うことなんですけれども、先ほど９５名しか今は入っていないと言われた。マスクをして、しゃべってはいけないという美術館の中でずっとやっていって、本当に美術の楽しみ方というのは、コロナだから、黙ってみんな全部のみ込んで帰るというのでいいのかどうかという。この時期だから、何か意見を見える化してあげるとか、何か意見交流が、今までは一緒に来た人としか意見交流はできなかったけれども、一緒に来ていない人と時間差で意見交流をできるとか、何か、学芸員の負担にならないけれども、学芸員もちょっと見てにやにやっとできるような何か

ができたらいいなと思いました。希望です。

そのほか、何かございますでしょうか。原田委員、大丈夫ですか。

【原田委員】　　はい。

【鉄矢会長】　　では、３番目でいいんですよね。意見交換です。

【事務局】　　教育普及事業。

【鉄矢会長】　　そうだ、教育普及事業が入っていないですね。すみません。ここに書いてある教育普及事業の説明のほうをお願いいたします。

【河上学芸員】　　では、私からさせていただきます。

①、鑑賞教室が、前回、緊急事態宣言を受けまして延期になったという御報告をさせていただいたと思うんですが、その後、日程を変更という形で、５月２８日の金曜日、休館中、閉まった状態だったのですけれども、撤去前でまだ作品があるときに開催いたしました。こちらは、市立南小の４年生が３組、３クラス来て鑑賞教室を実施し、こちらの期待を上回る反応を子供たちがしてくれて、とても楽しく時間を過ごすことができました。

その後、今後に関しましては、９月３日、こちらは「メタモルフォーゼ」展――今開催されている展覧会中に開催予定であります。

残りの７校に関しては、全て大川美術館の藤島武二作品を中心とした「二人のスケッチ」展の開催中に実施される予定です。

【鉄矢会長】　　ありがとうございます。教育普及事業に関しての御質問等はございますでしょうか。

【坂井委員】　　４年生というのは、今河上さんは、とても期待を上回るとおっしゃっていましたけれども、どんな感じの反応なんですか、今までずっとやっていて。

【河上学芸員】　　先生と事前に打合せをしたときは、なかなか、「子供だから、あまり難しいことは」みたいなことを受けていたので、前回の展示でも戦時中に描かれたスケッチなども展示していたので、ちょっとそういうのも先生方が心配されていた部分があったのですが、歴史的背景を抜きにして、子供たちが、絵を、絵そのままとして鑑賞してて、タイトルから額の隅まで興味を持ってくれました。タイトルが漢字だと、「これは何と読むんですか」、「どういう意味ですか」とか、「これは戦争のときの船ですか」とか、あとは「この裸婦はよく描けていますね」とか、「すごくいい色を出しています」とか、心配していた私たちがちょっと恥ずかしくなるぐらいの反応でした。子供たちを甘く見てはいけないというか、とても感動して、西尾と「うれしいね」と言いながらずっと対応させてもらいま

した。３組が終わった後はぐったりしましたけれども、とてもとてもいい鑑賞教室の時間が過ごせて、次回以降も期待しているところです。

【坂井委員】　　そうなんですか。なるほど。今どきの４年生くらいというのは、結構美術館慣れというか……。

【河上学芸員】　　いや、初めての子が多かったです。

【坂井委員】　　そうなんですか。

【河上学芸員】　　展示室の扉を開けるときに、「僕、どきどきしています」「初めてです」と言っている子供たちがいたり、「私も学芸員になります」と言って帰っていってくれた女の子も。ちょっとびっくりしてしまいました。見て、ただ帰るだけかななどと思ったら、もうとんでもないという。

【坂井委員】　　すごくやりがいがありますよね。

【河上学芸員】　　はい。みんなこうやって。ただ、ちょっと今１点、個人的に反省しているところは、鑑賞している間にメモをいろいろ取るというところで、紙と鉛筆をみんな持ってメモをとるんですけれども、記録写真を全部眺めると、みんなメモしている写真しかないんです。だから、もうちょっとメモなしで、作品をじっくり見るという時間をあえてつくったほうがよかったなと今、反省点として思っているところです。

【鉄矢会長】　　今の子供たちも、メディアリテラシーの勉強のためにも、やらせ写真を撮ってもいいと思うんです。「今ここで写真を１枚、みんなが勉強しているシーンを撮りたいから」とちゃんと説明して、「こっちを見てくれる」とか、それが多分メディアリテラシーで、子供たちが全てのコマーシャル写真を見て、みんな、こうなんだと思ってしまうのではなくて、ああいうのはこうやって撮られているんだよというのを実は伝えてあげるというのも一つありだと思うんですよね。そんないいタイミングで撮って、手前に子供が写らないという理由はないはずなんです。あと、子供の顔が見えないように撮りたいわけじゃないですか。それがすごく難しいんだけれども、それはある程度やらせでも、だんだんそれが使えるようになったり、「そういうのもありなんだよ」とうれしそうに子供もしゃべってくれるかもしれません。

【河上学芸員】　　確かに、４年生は全然子供ではなかったという、そういう印象でした。

【坂井委員】　　本当ですね。１０歳の子供ですよね。

【河上学芸員】　　１０歳はもう。

【坂井委員】　　何か、すごく大事な話ですね、今のは。子供だからといって、子供向け

に解説しては駄目なんですね。そのまま見てもらう。むしろ大人のほうが、何か書いてある解説を読んで見た気になるというのがあるけれども、子供は本当に見たままに感じるという。それを妨げないように教室をやるというのが大事なんですね。

【河上学芸員】　　いろいろ課題も見えて、楽しみです。

【鉄矢会長】　　今聞いていて、事前情報がないほうがよく見て、その後に本当は情報を入れてあげたいですね。

なぜ学校の先生は戦争の話をしてはいけないんですか。

【河上学芸員】　　いえ、してはいけないのでは全然なくて、戦争と裸婦についての子供たちの反応を少し心配されていました。知らないからということなのか、まず大戦のことをまだ教えていないからとかということなのか、私にもちょっと分からないのですけれども、ただ、子供たちはもうみんな準備ができているというような。

【鉄矢会長】　　それは一回、先生とじっくりしゃべったほうがいいですね。

【河上学芸員】　　そうかもしれないですね。

【鉄矢会長】　　どういうか、ここのはけの森美術館自身が、戦争画を扱っているということを、今後ともやるときに、私は一期一会だと思っていますので、子供たちは年に１回しか来ないとか、一生に１回しかここに来ない人もいるので、そのときに、ここで戦争というのをどのように見るかというのも、すぐに響かないかもしれないけれども、後で「ああ」と思うとか、いろいろな場面があるので、先生のほうが「伝えないでください」という感じで、それはこっちとしてはおかしいぞぐらいの話で、先生の言いなりだと、逆に言うと、本当にがっぷり四つのコラボレーションはできないと思うので。

【河上学芸員】　　そうですね、本当に。先生も多分そうだと。でも、全然、「やめてください」とか、そのようなマイナスの御意見ではなくて、ただ、ちょっとその準備ができているかというところ。しかも「シンガポールへの道」も展示していたので、前回の展示では。でも、すごく人気でした。みんな寄ってたかって、メモを取って鑑賞していました。

【坂井委員】　　多分、子供たちは、あらかじめ戦争の背景を話していなくても、絵を見て、違和感を感じるでしょう、「何か変だな。知っている外国の絵と違うぞ」と。そういうものがあれば、それを拾い上げて、実はこうだったんだよというほうが効くのかもしれないですね。

【鉄矢会長】　　そうですね。

【河上学芸員】　　本当に、子供たちから質問がたくさん出て、楽しかったです。

【鉄矢会長】　　私自身も、ここの運営委員で、薩摩先生などからいろいろな話を聞きながら、軍艦の中にあった絵は明るい日本の絵だったんです、戦争画でも。軍艦の中に飾る絵があって、入っていくんですね。神宮かどこか、お伊勢さんでしたか、何か入っていくような、行進というか、あそこの、シンガポールの何とか、何という絵だったか。「陥落の日」か。

【河上学芸員】　　「陥落の日」？

【鉄矢会長】　　神宮外苑の。戦争へ行っている軍艦の中の人たちが見たい絵と違うんだというのをすごく思うので、そういうのも多分面白い情報なんだろうなと思って。

ということで、そのまま意見交換に移行してよろしいでしょうか。

今のように司会を入れてしまうと、話が続かなくなってしまうと大変ですけれども、お二人の学芸員はこの美術館をどのようなムードの美術館にしたいと思いますか。というか、入ってきて、例えば今どこかの館は、もぎりがあってという話などは、いきなりもぎりで、普通では入り口やロビーも入っていけないのかと思ったりとか、どんなムードにしたいのかなと思って。あそこのロビーみたいなところはフリーで、座っていて、近所の人たちがしゃべってもいいのよという話なのか。

【河上学芸員】　　ロビー。自動ドアを開けて入ったところのロビー。

【鉄矢会長】　　あそこでリーフレットを取れますよね、いろいろな美術館の。でも、あそこも入ってはいけないようにしたいのか。

【河上学芸員】　　そういうことですね。

【鉄矢会長】　　だから、ムードが、開かれた美術館と言われながら、市民の美術館と言われながら、どのようにしたいんだというのをイメージしているのか、それともみんな黙って静かに絵を見ている人たちが入るのかというのを。

【西尾学芸員】　　この間、市民交流センターの方との意見交換の時間をいただきまして、そのときにスタッフの方が、かつて美術館に来て、はけの森美術館がまだ財団だった頃に、スケッチを２日間、画家の方に指導していただいてみっちり行ったという話を伺ったんです。そういうワークショップを行って、そういう、市民の皆様がいらっしゃって、自分で手を動かして、一緒にしゃべって物を見てという、五感を使って何か美術館のことを肉体的に感じるというような経験がすごく印象に残ったという話をされていて、今の状況であっても、例えば美術館の外をスケッチするとか、そういうことは可能ですし、この美術館の建物自体もとても重要なものなので、そういった形でもっと有機的に関わっていくとい

うことは今後は必要だし、こういった状況であっても、いろいろと手段を考えれば、できるのかなと思ったりはしております。
以上です。
【河上学芸員】　　私も。どうだろうな。まずちょっと基本的なところとして、もうちょっと周知ができたらというところを大きく……。
【鉄矢会長】　　もうちょっと何と言ったのか。
【河上学芸員】　　周知、広報といいますか、美術館は知られているんですけれども、知られていない。美術業界でも知られていないのが現状といいますか。知られているんだけれども、何かちょっとベールに包まれているとか、聞いたことはあるけれども、行ったことはないとか、そういうもやもやっとしたものを取っ払えるような広報活動なり、企画もしかりですけれども、もう少し、何ができるかなというのをこの４月から考えているところではあります。でも、来てもらったら分かってもらえますし、このロケーション、ここの環境というのは、なかなかないと思うんです、都内で。しかも、中村研一という作家も、再評価というとちょっと言い方に語弊があるかもしれないんですけれども、とても重要なアーティストですので、そういった意味でも、きちんと注目されるべき施設だという自負――自負と言うとあれですけれども、でもそういう気持ちは強く持っているので、今後どのように発展させられるかなとは考えているところです。
【鉄矢会長】　　私たちはどういう手伝いができるのかなと思って、学芸員さんがイメージしたものが我々と合致していれば、そのようにしたいんだというと、我々も発信するとか、そういうのをサポートできるのかなと思って、逆に言うと、そういう意見を発してくれないと、我々は、ただ展覧会だけで、展覧会だけの発でやるというと、展覧会を見に来るという、見るだけの美術館になりそうなので、そうでなくて、もっと開くとか、さっき言った五感で何とかということであれば、そういうことだとか……。
【河上学芸員】　　もう少し子供が、先ほどの鑑賞教室だけではなくて、本当にこのコロナの状況がいろいろなことを遮っているようなところはあるのですけれども、集まって何かをするという機会を増やしていって、本当にここを使ってここで何かをするという経験を、見るということもそうだし、見るだけではなくて描くかもしれないし、スケッチをするかもしれないし、踊るかもしれないし、分からないんですけれども、ここを拠点に、ここで何かをするという機会をたくさんつくれたらいいなと思っているので、さっきの自動ドアのところのお話もそうですけれども、今は何となく閉まっているような状況かもしれ

ないですが、気軽にチラシを取っていってもらえるような雰囲気づくりというか、そういう、さっきのちょっともやもやしたベールが、何か働いているとそのように思わないんですけれども、「どうぞ、どうぞ」と思うんですけれども、それをどうやったらなくせるかなということで、むしろ御意見をいただいたほうが、こうしたほうがいいとかと何かあったらうれしいです。

【鉄矢会長】　さっきのイーゼルと、あとは、美術館の外が描けるということであれば、「イーゼルを貸し出します。夏休みの宿題の絵はここでどうぞ」ということはできるのだろうなと思って。

【西尾学芸員】　実は、もうそういう話も出ております。今のを今回の企画展の最中にやるのはどうかという話題になって、私もそれを例えばホームページで告知しようかと思ってはいたのですけれども、さすがに先週からすごく跳ね上がってしまったので、今はちょっとちゅうちょしているという状況です。

【鉄矢会長】　口コミでもいいから、その受付の件とイーゼル貸出しの件はぜひ。

【河上学芸員】　イーゼル貸出し。

【西尾学芸員】　イーゼル貸出し、面白い。

【鉄矢会長】　「１６歳以下には貸します」とか。

【原田委員】　よろしいですか。展示スペースがすごく狭いというのが一つの制約になると思うんですけれども、見る側からしても、展覧会へ来たときに、見応えがあったなというのは、一つ一つの作品はもちろんなんだけれども、ある程度ボリュームがあって、いっぱい見たなという感じがすることがあるんですね。そういう意味では、ここはとても小さいので、ボリュームという意味では不利なのかなと。今回は、可動壁ですか、あれが１枚あるだけで５点くらい絵が増えますけれども、何かもっと可動壁があってもいいのではないかなと。作品が増えたほうが見応えがあるという僕みたいな人もいるかもしれないんですね。

それからもう一つは、最近いろいろなところで、入場券をよく見ると、「半券を持ってくると半額です」とか「１割引です」とか、「後期展が見られます」とかというのがあるのですけれども、例えばスペースの制約を打ち破る方法として、展示替えをしてしまう、３回ぐらい。そうすると、全部替えることはないんだけれども、増えますよね。そうすると、展示替えの期間は、その券を持ってくれば、これは２００円ですから、半額だと、１００円で見られますとか、いっそのこと、半券を持ってくれば、その途中の展示替えをしたと

きも見られますとかというようなことでボリュームが出るのかな。これは地元の美術館だからしょっちゅう行けますので、そのサービスというものはもしかすると意外に効くかな。それから、自分が行けなくても、「面白かったよ。これを持っていくと半額だよ」と言って近所の人に渡すとか、そんなこともできるのかなと思いました。

【河上学芸員】　　ありがとうございます。

【中村学芸員】　　すみません。こちらのほうから補足させていただきます。半券によるサービスは、これは当館のほうでも実施したことがあります。２０１７年ですかね、国立公園絵画を展示したときに、前期と後期で作品を総入替えするという形で展示していまして、そのときに、前期の半券を持ってきた人が後期で招待券に引き換えられるということをやりました。このときにたしか後期で１６７人、招待券に引き換えたお客様がいらっしゃいましたので、一定の効果があるということは、確認ができております。

ただ、展示替えをするには、このときもそうだったのですけれども、週６開館という当館の通常のペースであると、月曜日の休館日に週１で展示替えをするという形になりますので、会期的な部分で言うと、タイミングとしてどこで入れ替えるか、どのくらい入れ替えるのかということを戦略的にやらないと、うまく終わらないんです。

加えて、展示替えをするとそれだけ展示に係る費用がかさみますので、ちょっと予算的な部分での調整というところでの各調整を含めて考えていく必要があるかなと思っております。ただ、一定の効果があることは確かですし、来館者の方からも国立公園絵画のときは大分好評をいただきましたので、積極的に、もし機会があれば試していければ、これは実際に喜ばれるだろうなと思います。

失礼しました。

【事務局】　　展示替えはいいアイデアです、普通なら。かなり学芸員の負担には確かになりますけれども、確かにお客様には喜ばれます。うちの場合、展示替えも全部業者さんが入ってやりますので、当然その分の予算もかかりますし、なので、予定しておいて、この展覧会については展示替えをするということで、その分、予算を上乗せしておいてやるということはできるかなと思います。

あと、すみません、ついでに、可動壁なんですけれども、今ちょっと可動壁は、今回１枚出したのですけれども、可動壁は３枚出せるのだったか。

【河上学芸員】　　４枚。

【中村学芸員】　　４枚。最大４枚です。

【事務局】　　最大４枚。コロナで、あまり密になれないように今はちょっと減らしていたり、あと、年度またぎの展覧会の場合は、実は中でギャラリーコンサートをやろうという企画があったりするので、そういうときのために何も可動壁を出さないで、どーんと広いままやるときもあるんです。今はもう本当に、可動壁を出すと、そこの部分ではちょっと空気がよどんでしまうので、今は出せないという制約がありますけれども、この状況が改善すれば、いろいろな展示の工夫はできるかなと思います。

【鉄矢会長】　　さっき原田委員がおっしゃったように、小さい展示室なので、もしかしたら、コロナでなければ、逆に小さい展示室の面白さはあるのだろうなと思って、一般的にギャラリートークというのは、誰かがギャラリートークするんですけれども、真ん中に机が出ていて、みんなで座ってギャラリートークして、普通に絵のことを話す時間が、しゃべる時間というのが、ある日の何時から何時まではしゃべる時間がありますよというのが一つできるのかなとか、あとは、美術館パスポートみたいに、子供が来てスタンプを押してあげる。年間パスポートではないけれども、そうすると年何回来たと最後に表彰して、「あなたは横綱です」という、美術館番付で横綱に載るとか、子供たちの趣味と楽しみとそろえながら何かできたらいいのかなと。

【坂井委員】　　大人がスタンプを集めると、喫茶店でお茶を飲めるとか。

【河上学芸員】　　いいですね。

【坂井委員】　　環境がこんな美術館はほかにないと河上さんがおっしゃったのですけれども、そのとおりだと思うんですけれども、それは、周りが堀で、立地がこれですばらしくてということと、もう一つ、非常に、要は遊ぶスペースというか、森というか、川というか、そのそばにあるみたいなことを考えると、この辺のトラフィックとは何なのだろうか。あえて美術館に来てくださいという話もさることながら、自然にこの前後の周辺のトラフィックの人たちがどんな人なんだろうと考えると、犬の散歩だったり、ジョギングだったり、子供を連れてランチだったり云々かんぬんという人たちが、「ついでに美術館も今度のぞいてみる」的な話に自然になるような流れというのも、何かこの立地ならではのあれなのかなと。都心ではそれはもう本当にできることではないので。

【河上学芸員】　　わざわざ行かないと、美術館は、何かわざわざ行くものという。

【坂井委員】　　ですよね。私は、前の展覧会は、自分の家からジョギングしながら来て、大汗をかきながら見ていまして、それでまたジョギングして帰ったんですけれども、何かそんなのもありなのか。自分はそれをやって、結構気持ちよかったし、美術館には失礼な

のかもしれないんですけれども、ちょうど真ん中の休憩、それで一息ついてもう一回走り出すみたいな、そんなあれができたので、そういう感じで周りの人がここを使うみたいなことも面白いかなと思います。

【事務局】　今冒頭におっしゃったとおり、ウォーキングの方が春・秋は多いんですよ。夏は暑くてどうしても客足が落ちるのと、夏休みなので、都内の美術館に行ってしまったり。

【坂井委員】　なるほどね。

【河上学芸員】　ただ、反対に中学校で美術館に行きなさいという宿題が出るんですよね。出て、見たり、本当にするのか分からないんですけれども、例年は出ていて、そうすると、夏休みの終わり頃になると中学生たちがどっと美術館に来るんですけれども、こういうのもすごい、地元に美術館があることはぜいたくだというか……。

【坂井委員】　本当ですよね。

【事務局】　宿題が間に合わなくても、見に行けば良いのではないでしょうか。

【坂井委員】　本当ですよね。行けばいいんですものね。歩いて行けばいいんですものね。

【事務局】　だから、そこら辺がすごくいいなというのと、あと、４年生で鑑賞教室をやった子たちが今度中学生になって、職場体験学習というのがあって、学芸員の職場体験に行ったりとか、「４年生のときに見ました」という子もいるし、あと先生になっている人がいました。

【中村学芸員】　最初の鑑賞教室に参加した人たちがもう２０代ぐらいになっていて、そこの先生でたしか鑑賞教室に来たことがあるという人が１人いたはずです。

【事務局】　だから、細々とですけれども、そうやって地元につながっていっているのと、あと、私たちも一体として、美術館と森とこの旧宅とかの文化財を含めてアピールしていきたいなと思っているので、ちょっとずつはやってはいっているんですけれども、新しく来た学芸員２人も、一体として考えたいということを言っていただいているので、そのことも含めて、展覧会とそれもやっていけたらいいなと思うんですけれども、ちょっとこの一体をアピールするために、東京都から３年間ぐらいお金をもらったんですけれども、ちょっと嫌がられてしまって、今年はぎりぎりどうにかお金をもらったんですけれども、「まだやるんですか」と言われてしまって、来年はもらえないなと思って。

【坂井委員】　コンビニの前に犬のリードを引っかけるところ、スタンドがありますよ

ね。あれがあるだけでも、犬を連れていっていいんだという感じがするんですが。サイクルスタンドがあって、あの棒があるだけで、来ていいんだという。うちへ来てもどこかに縛れますよね。この美術館のどこかしらにできるんだけれども、ビジュアルとしては、空気入れがあって、サイクルスタンドがあるだけで、チャリダーたちを集めますよという、そういうところですよね。

【坂井委員】　そうそうそう、本当にそう思います。そのアピール力はありますものね。

【鉄矢会長】　地域に根差した美術館にしたいですね。

そのほか、何かございますでしょうか。

【坂井委員】　一つ質問なんですが、今回、私は御礼申し上げたいんですけれども、このチラシとチケットを送っていただけたんですよ、自宅に。運営委員になってから何回目かの展覧会なんですが、それをしていただいたのは初めてで、送付の基準が変わったのかしらと思って、どういうあれで送られたのか。

【事務局】　すみません。申し訳ないんですけれども、住所録から漏れていたんだと思います。申し訳ございません。

【坂井委員】　いや、嫌みでも何でもなくて、ありがたいなと思ったんです。その割に来ていなくて申し訳ございません。あれっ、どういう基準が変わったのかな、私たち全員に送られるようになったのかと思いました。

【事務局】　すみません。すぐ送らなければいけないんですけれども、多分、住所録の更新のときに漏れてしまったようで、申し訳ございません。ありがとうございました、言っていただいて。

【坂井委員】　失礼しました。とんでもない。ありがとうございました。

【鉄矢会長】　意見交換はそのほかにまだ、これはおかしいんじゃないのというのがあれば。

一つ、本当にジャストアイデアなんですけれども、「中村さんの日」とかはできないんですかね。中村さんを連れてきたら、一緒にただだよとか。栗山監督がそうですね。栗山町で、栗山姓の方に。

【中村学芸員】　「中村の日」ですか。

【鉄矢会長】　中村さんが中村研一を知るというのはすごく重要だなと思って。同じように、「けんいちさんの日」でもいいし、「小金井さんの日」でもいいんですけれども。

【坂井委員】　面白いですね。

【中村学芸員】　　代々、学芸員に中村がいますので、「親戚ですか」と必ず聞かれます。

【鉄矢会長】　　でも、その人だけではなくて、その人が連れてくるとか、その人と一緒に来た人がみんな割引で、半額で入れますよとかいうだけでも、何か楽しい。その人は、自分中村だから、友達には「そこへ行こう」という気になっているんだけれども、小金井市全域にいる中村さんがみんな知ってしまったりして。

【中村学芸員】　　ありがとうございます。それはいいかも。「中村の日」。

【坂井委員】　　研ちゃんの誕生日をそれにするか。無料か何かにして。

【中村学芸員】　　研ちゃんの誕生日、５月１４日は無料。今はそうですよね、今は無料の日にしているけれども、「中村の日」にする。すごくキャッチーですよね、かなり。

【事務局】　　そういう無料観覧をやると、何かクレームが出そうだから、富子ちゃんの誕生日にやったらどうでしょうか。

【鉄矢会長】　　名前に「富」という字が入っていればいいと。

【坂井委員】　　そういうのをやることで、新聞の武蔵野版とかで取り上げてくれる可能性がありますよね。それこそ周知ができるという。

【鉄矢会長】　　「全国中村会議」とか、ここで打ち上げたりして。だんだんハードルを高くしていって、中村という名字で絵を描いている人とか。

【事務局】　　狭めて、証明するとか。

【鉄矢会長】　　ありがとうございます。

そのほか何か、なければ、その他、御意見等はございますか。議題４番、その他。

御意見がなければ、事務局から会議録の校正についての説明をお願いします。

【事務局】　　では、本日、前回の運協の会議録をお配りしておりますので、大体１か月後の９月１０日ぐらいまでに、もし校正がある場合は、私のほうまで御連絡をお願いいたします。

【鉄矢会長】　　では、次の運営協議会の日程調整のほうもお願いします。

次回はいつですか。

【事務局】　　１１月ぐらいです。

【鉄矢会長】　　１１月か。

【事務局】　　そうですね。１０月３０日から展覧会が始まるので、１１月のほうがよろしいかなと思いますが。

【鉄矢会長】　　４日と１１日はいかがでしょうか。

【事務局】　　４日と１１日を押さえておきますか。では、４日と１１日で山村先生に確認いたします。

【鉄矢会長】　　それでは、日程調整をよろしくお願いします。

ほかになければ、以上ではけの森美術館運営協議会を終了しますが、よろしいでしょうか。

では、会議を終了したいと思います。ありがとうございました。

――　了　――